編集後記

私が初めて太田俊太郎先生にお目にかかったのは、たしか一九八二年の春であった。といっても、私は太田先生がスピーチされるのを、ただ遠くで拝聴していたにすぎない。

私の指導教授であった斎藤眞教授の還暦記念の論文集がその頃東大出版会から刊行され、それを記念するパーティが国際文化会館で催された。もっとも、駆出しの私は執筆者ではなく、ただ斎藤教授の指導を受けているという理由で末席を汚していたにすぎない。実際には、下手な写真係として、ただ右往左往していた。

執筆者の先生方が全員順番にスピーチされた。太田先生は、まず先生一流のご謙遜でご自身の論文の「不出来」を「お詫び」された。その後、「しかし、慶應義塾は大きな大学でして、私のアメリカ政治史の授業にもかなり多数の学生が出席しております。私の論文を除けば、[と、再び謙遜されながら]、すべて日本の超一流の研究者が書いた論文だからあなた方もぜひ挑戦してみろと学生に言って、かならず買わせるようにしております」と述べられた。そして、「私は内容では貢献できなかったのですが、その分おおいにセールスの方で貢献させていただきたいと存じております」と話を結ばれたのであった。出席者一同大爆笑であった。このときは、直接先生と言葉を交わす機会はなかったと思うが、謙虚ながらもユーモアのセンス溢れるお人柄におおいに感銘をうけたことを鮮やかに記憶している。むろん、先生の執筆された論文が非常に優れたご研究であることは、いうまでもない。

その直後、東京近辺在住のアメリカ政治研究者が中心となって、「アメリカ政治研究会」という月例の研究会を発足させた。ここで、定期的に太田先生とお会いするようになった。とくに一九八三年頃から、太田先生のお世話で慶應大学の研究室を使用させていただくようになり、また私が会の事務局を仰せつかるようになってから、日程等のご相談で頻繁に直接お話をするようになった。私のような若造にもいつも大変ご丁寧に応対していただいて、恐縮するばかりであった。実は、私が慶應にお世話になる話を初めて承ったのも、このような事務連絡のための、ある日の電話での会話においてであった。まさに青天の霹靂であった。

かくして、太田先生と私の間には、通常の「師弟関係」ではありえない短い「おつきあい」しか存在しない。もとより、私には「弟子」と称する資格もない。しかし、慶應義塾に奉職する以前から、そしてとくにその後、先生は私の未熟で勝手な研究活動を、おそらく通常の指導教授以上に暖かく見守って下さっている。

先生は、昨年選択定年で退職され、現在、金沢と京都そして東京にてご退職以前にもまして忙しく教鞭をとられている。ぜひともご健康にも気をつけられながら、今後とも後進をご指導いただけますよう、切にお願い申し上げる次第であります。

平成七年二月

法学研究編集委員会　久保文明